一日教育委員会（教育懇談会）意見交換記録（要旨）

□日　時　　平成 29 年 9 月 6 日（水）　13：30～15：30
□場　所　　笛吹市スコレーセンター
□出席者　　132 人
　　（内訳）ＰＴＡ関係者　　107 人
　　市町村教育委員会関係者　　25 人
　　一般　　3 人

テーマ１　学校と家庭及び地域の連携について

１　家庭学習の推進（事業）について

（質問・意見）

・家庭学習定着促進事業の事例を少しでもご紹介いただきたい。どのような内容でコミュニティスクールの教育が行われているのか、参考に教えていただきたい。

・もう１つは質問。新しい学習指導要領では小学校でも英語が必修になり、授業時間が増えるということは保護者も想定しているわけですが、少人数の指導をしていただくために必要な先生方の配置はしていただけるのか教えていただきたい。

→義務教育課長

・初めに家庭学習について。全国学力学習状況調査の中には、児童生徒が答えるものや、学校の校長先生が代理で答える項目があり、この項目の中で、学習の状況等を聞いている。本県で全国平均を下回ったものが２つ３つあり、その１つが家庭学習の時間が短いこと。県では、昨年度、「学びの甲斐善八か条」という家庭学習のすすめの手引きを作成した。さらに昨年度末に、「家庭学習実践事例集」というものを作り、全国と県内および全国から優れた実例を集め、関係機関に紹介した。これらの取り組みは、各市町村の取り組みと共に家庭学習の定着を目指すもの。

・それと授業時間のことについて。今、一週間の中で基本的に小学校では４５分の授業を２８コマやるような形をとっているが、今回、英語が１時間入って、２８の中で２９コマの授業をするような形になる。これが今の課題で、４５分を１５分ずつのコマに分けてやっても構わないし、また６０分の授業形態でも構わないという形になっている。忙しい中で大変厳しい現状があるので、県では授業のコマ数の取り方を具体的に紹介したりしている。基本的に本年度と昨年度を比べても授業時間だとか、あるいは長期の休業が縮まっている例はないので、各学校で子供たちのことを考えながら行っていくような状況。

・この地区では山梨市の笛川小学校がコミュニティスクールということで行っている。あまりなじみのない言葉だが、要は地域の方々の意見を学校面に取り入れていくこと。学校運営協議会というものを開き、どのよう方向性で教育をすれば良いのかというようなご意見いただきながら、学校長が学校運営を進めるというもの。私立学校の理事会をイメージしていただけると良いかもしれない。地域に密着した教育を行っていくということで、今、全国で約１１％の学校がコミュニティスクールの指定を受けており、県内では１０校が指定を受けている。

→守屋教育長

・全国学力学習状況調査は、学力テストと同時に100項目くらい、家庭での学習の状況や地域の行事への参加状況などの質問項目があり、学力と両方を比較しながらその関連についても調査をしている。例えば、学校の取り組みだけが子供の学力を伸ばすのかというとそうではなくて、家庭での学習時間や地域での教育環境など様々な環境が子供たちの学力に関係しているのではないかと思っている。子供たちが、地域の良さを理解し、地域に戻ってくるということであれば、地域の方々が色々な応援をしたり、教育に関与していただく仕組みをつくり、学校と地域が一緒になって子供たちを育てていく、そのような環境をどうやって作るかということを学校の授業だけではなくて、ＰＴＡや地域の自治会の方々の協力ももらって考えていくのがコミュニティスクール。

→和田教育委員

・家庭学習の最終的なねらいはやはり主体的に学んでいく子供を育てるということ。もちろん学校の中でも行うけれども、一生学び続けるという意味で、家庭の中でも学べる子供達をつくるという面も一方ではあると思う。昨今は、子供が家庭に帰っても親が仕事から帰っていないとか、子供達とそこで話をしたり、子供の学習をみてあげることができないという家庭もあると思う。帰った時に家族がいて、「宿題したの」とか、「今日の学習どうなの」と言えないような家庭については、それなりの支援が必要。学校によっては、放課後にそのような家庭の子供達や、一人では学習できない子供達を集めて、放課後の学習会のような形で取り組んでいる学校もある。

→飯室教育委員

・前に双葉西小学校に行った時のことを少しご紹介したい。学校に行くと、下駄箱の靴が本当にきれいに一列にずれもなく、子供達がしっかり下駄箱に靴を揃えて入れていた。話を聞くと、毎年８月にＰＴＡの皆さんがイベントをやるということ。そこで、ＰＴＡの方々がイベントをしながら学校の先生方、地域の教育委員会、そして児童の間で、色々な催し物をやるという。それが思い出になって、一歩一歩前に進んでいくのだと思う。

→三塚教育委員

・私ども医療の立場から言うと、昔は公助といって国が助ける、今は、共助と自助。自助というのは自分自身。共助というのは地域で支え合うということ。今、医療業界も実は国がどうのこうのしようというということではなくて、地域社会がこの高齢者を支えていくという考え方をしている。これは実は教育業界もまったく同じことで、子供達というのは、やはり自分で自分を律していくことがなかなかできなくて、親と学校と地域が一緒になって子供を育てるという形で地域が一緒になってこれからの子供を育てていくということ。これは全てにおいて、今、日本がそういう状態で、地域で一緒になって育てていくという考え方になっているので、一緒になってやるということ。それから、子供達は山梨県の宝であり、国の宝でもあるということで、みんなで子供を育てていこうと、私たち一般の大人が思っていくことが一番大切なことではないかと思っている。

２　コミュニティスクールについて

（質問・意見）

・コミュニティスクールについて、質問したい。全国の設置率に比べて、山梨県の設置率が少し低いような資料がある。これは現状の学校運営で満足しているから、新たにコミュニティスクールを作らなくても地域との連携が図れているのか、それともまだまだ地域等へその周知ができていなくて、設置に至らないのかというところを教えていただきたい。

→義務教育課長

・全国の状況でみると、政令指定都市がまとめて導入しているようなところもあるので、全国的に均等に広がっているというより、政令指定都市を中心に集中的に取組が進んでいるように思う。県内でも全町あるいは全市でという構想も既に持っているので、これからだんだん趣旨や内容が理解されていくと、今やっていることを無理なく移行する形でコミュニティスクールという形態になってくると考えている。

→守屋教育長

・まず、このコミュニティスクール自体は市町村の教育委員会や、学校の現場が判断してそのような組織をつくるかどうか県へ持っていく。県において無理をして形式的な組織を作っても、結局は地域の皆さんの声を学校が聞くような組織にならないと困る。学校側も地域の皆さんの力を借りたいと思うので、地域の皆さんが本当に学校側と一緒になって地域の子供を育てようという機運があれば、その組織がどんどん作られてくるので、そのような機運をＰＴＡの皆さんがぜひ、学校と一緒に作っていっていただきたい。

３　スマートフォンの使い方について

→守屋教育長

・スマートフォン、パソコンなどの機械の使い方について、ご意見をいただけるとありがたい。

・小学校、中学校はスマホの持ち込みは禁止だと思う。例えば１０年とか２０年先、ＩＣＴが生活に普及したときに、スマホも様々な機能を持っているので、学校でも当たり前に教材として使えるかもしれない。一方でスマホは、依存しすぎてただ遊びで使っているとか、スマホをやっていて身が入らないとか色々な意見があると思う。ＩＣＴの機材を、学校の教育と一緒になって生かしていくべきか、使わせないほうが良いのか、意見があれば教えていただきたい。

（質問・意見）

・スマホについては、使い方をしっかり教えていけば、大変有意義に使えると思う。使い方の講習等をしっかりする。極端な話かもしれないが、そろばんのようにここまでできたら５級、ここまでできたら４級というように、子供の遊び心をくすぐるような方法で指導していったら大いに活用はできると思う。

・適切な使い方を学校現場で教えるということは、その通りだと思う。ただ、おそらく、小中学生が、普段の生活の中で持参していくという形になると、やはりけじめというのも大事だと思うので、学習の機会でそのような機械を使う時は、日常生活と学習のけじめも大切と思う。

・日川高校でも、今、「クラッシー」の導入を検討しているところ。スマホ・タブレット等を使いなが

ら授業の内容などを事前に家で学習して、学校でその課題を解くというような発展学習の展開を検討されている。新しい使い方を一つ覚えることによって、スマホの価値や持っている意味を理解して使えば、子供たちの視野もまた広がるのではないかと思っており、そういった導入というのは非常に良いことだと思う。

→和田教育委員

・今後、スマホも学校教育の中にという可能性も出てくるということだが、現状を考えたときに、スマホなどは２歳、３歳の幼児の頃から触れて、それに夢中になってしまうこともある。親が与える時の年齢もあると思うし、学校でもいつからそれを使用させるかということもあると思う。

・小児科の先生の中には、あまりに小さい時からスマホに触れさせてしまうと、思考や判断、それから意欲を作ったり、感情のコントロールをしたりする働きをする脳の前頭前野という部分のメカニズムが、十分に発達しないまま子供が成長していくことに大変危機感を持っている方もいる。その辺りのことも大人がきちんと学習する中で、子供達にスマホをどのように与えていくかということを考えていかなければいけない。与えてから考えるのではなくて、与え方も十分大人が学習をしていく必要があると思う。もちろん、良い物は活用していくし、これからそういう時代になっていくと思うので、全く駄目ということではないけれども、そのへんがきちんとできているかということが大変不安。いつ与えて、与える時にどのような約束をするのかということがとても大事。それは私たち大人の責任ではないかなと考えている。

→武者教育委員

・小児科医・眼科医の立場から。病理的には、やはり、ＬＥＤライトは刺激が強くて、覚醒状態になってしまうので、睡眠不足に直結するということも言われている。まさにスマホ依存ということも問題になっている。

・使い方というところで、中学生を見ていると、しっかりけじめを持って、約束を守ってできるお子さんは良い。お子さんの中でも親御さんに隠れて、布団の中に持っていき、実は２時３時まで動画を見ていて寝不足で朝起きられないという話も聞いたりする。家庭でというのも大事だが、ある学校では、スマホの使用は１０時までにしましょうというのを、各教室に貼って、学校全体でそういうことを提唱している。同級生も、あるいは先輩も１０時までしかスマホは使えないとなれば、ラインやメールが回ってきても返事を返さなくて良い。子供達の中では、ラインで既読が付いてないと仲間外れになってしまうなどということもあったりするので、学校である程度時間を決めるというのは、初めの段階では必要ではないかと思う。どうしても大学受験の時とか、就職の時、今やそれで合格通知がきたりして、スマホがなくてはなかなか難しい時代になっているので、初めの時だけは親も学校も介入して、単純に時間で区切るとかというところでも構わないと思うので、そういった導入が必要だと思う。

→三塚教育委員

・基本的には、学校現場でもＩＣＴの活用の中でも、スマホは絶対的にこれから必要なことであって、それと家庭でのスマホの使い方をごちゃまぜにしてしまうと訳の分からない状況になってしまう。学校現場ではどういった活用の仕方をするのかということが一番大事なこと。それともう１つ、家庭においてのスマホの使い方は、親が子供と面と向かって話をするとか、子供と対話する時間をしっかりと作っ

てスマホの使い方を親が教えていけばいいわけですから、そこのところをコンフューズしないようにして、学校現場では、スマホは将来的には必要になってきますから、あとは親の子供に対する接し方の問題。それは私たち大人が自分たちでしっかり考えていくという、これに尽きるのではないかと思う。

→守屋教育長

・多分このＩＣＴの関係は、色々な意見があると思う。ただ、もう間もなく生活がガラッと変わってくるのではないかということを言われていて、いずれスマホも含めて、ＩＣＴは多分生活のベースになってくる。学校の生活も多分そういうものがベースになってくる時代がそう遠くない時期に訪れるので、その過渡期をどうやって学校と家庭でフォローしていくかということを意識して、それぞれ地域や家庭で、どのようにうまく適切に利用させていくかということを考える時期にきているのかなと思っている。

テーマ２　子供同士の望ましい関係づくりについて

１　いじめについて

（質問・意見）

・子供同士の関係で、親にとって一番問題になるのは、やはりいじめの問題というのが一番心配のこと。資料を見せていただくと、山梨県においては児童・生徒の規範意識が高く、いじめに対してもいけないと思っている子供が多いということで、少しほっとしている。また学校も予防対策ということで、アンケートなど対策をしていただいているということで非常に感謝している。しかしながら、やはりいじめというものは、いつどこで誰にでも起こり得ると考えており、いじめられた時に自分で逃げ道があったり、もしくは信頼できる人に相談したりとか、柔軟に対応できる力を一人一人の生徒が持つことが大切。そのような力を持った子供を育てるために、学校としてどのような対応が考えられるのか教えていただきたい。

→野田教育委員

・いじめの問題を考えると、昔のいじめと今のいじめは違うように思う。昔は、いじめることもあるけれども、その子が他の学校の子にいじめられたりとか、誰か同級生にいじめられたりとかしたら助けてやったりすることがあった。今のいじめが違うのは、臭いとか、汚いとか、態度が悪いといって、何か理由を付けて、その人の人格を攻撃するということ。結局、人の中身を攻撃するようなところに今のいじめの陰湿さがあるような気がする。もっと広げていくと、体が弱いとか、障害があるとか、そういうことまで否定してしまうことになってしまう。子供の優しさまで根こそぎ奪ってしまうようになってしまう。僕はそこが一番問題なのではないかと思う。

→守屋教育長

・いじめは、大体、小中高で年間 2,700 件事例があると承知をしている。私ども高止まりという言い方をしているから、減ってはいない。いじめの認識の仕方が、5 年、10 年前と違っていて、例えば児童・生徒がいじめと感じれば、それはいじめと認識をするようになっている。今後、いじめの解消を図るようにして、その割合を高めていくということが、県の教育委員会の目標にもなっている。

→和田教育委員

・学校現場ではアンケートをとったり、教師の観察だったり、１人の教師では気付かない場合は、お互いに情報提供し合ったりしながら、学校全体の中で共通理解を深めながら対応していると思う。

・命の授業という形で、みんな幸せに生きる権利を持っているというようなことを子供達と一緒に考えたり、命の尊さとか、相手を思いやる心とかということを、道徳の時間などを使って話をされている学校や、学校で集会を持って、教師主導ではなくて、子供達が中心になって集会を作り上げていくという学校もあるかと思う。もちろん、学校はものすごく大事で、子供の実際の居場所ですけれども、例えばいじめのニュースを流された時に、家庭でどのような会話をされているのか、家庭での取り組みなどについてもお聞きしたい。

（質問・意見）

・実は息子も、いじめまではいかなかったかもしれないが、個人にちょっと攻撃されていた時期があった。やはり子供はなかなかそういう話を家ではしない。今は、その問題は解決している。それをなぜ解決できたかというと、子供の友達が、まず、気がついてくれたこと。最近、元気がないということで気にしてくれて、その子が先生に話してくれ、いじめが初めて分かったというのが実態だった。子供と話をして、何で言わなかったのかと聞いたが、やはり話したくないということだった。とにかく親に言えなかったら、周りの友達に相談しなさい、あとは先生にお話したりというようなアドバイスをした。

→三塚教育委員

・子供がいじめに遭った場合のシグナルをどうやって親がつかむのか、周りがつかむのか。やはり、子供をどうやって親が育てていくのかという、親の子供への接し方の問題しかないような気がしている。先ほどのスマホの問題と全く根は一緒。子供がいじめられた時に誰かが受け皿となれるような組織づくりを地域でやっていくということが大切なことじゃないかな。いじめは絶対的に、無くなるものではないので、それをできるだけ未然に防ぐことと、それが拡大しないように、広くならないような予防策を打つということが一番大事。そのためには親の視線と地域がどうするのか、学校現場はどうするのかということを一緒になって考えていくことが大事ではないかと思っている。

→武者教育委員

・いじめの問題というと、どうしてもいじめられる側について注目されがちだが、いじめる側への対応重視ということが、再発防止のためにも必要かなと思う。いじめる側に心の問題があるということが、実は多かったりする。あるいじめるお子さんがクラスに１人いて、そのお子さんが周囲を次々といじめているということがあった。やはりそのお子さんには、親御さんが忙しかったりという問題があって、孤独感があったということ。クラスで色々話し合いもして、親と話し合いをして解決した。

・いじめる子の親御さんが、ものすごく厳しい親だったりすると、家に帰ってその子が親からすごく折檻されるというケースもある。そのようなお子さんは、家でストレスが発散できずに、学校に来てストレス発散のためにいじめをしているという、悪循環が生まれていることもある。いじめの問題はどうしても、いじめられている方ばかりになってしまいがちだけれども、いじめている子をもう少し学校の現場でケアするというのが必要ではないかと思っている。

２　子供のコミュニケーション能力について

（質問・意見）

・コミュニケーション能力が子供達に不足しているということについて。教育委員会ではどのように考えているのか伺いたい。グローバル化社会と言われ、外国の方々と接する機会が多くなってくると思うが、日本人は自分の気持ちとか、考えていること、思いを積極的に発することが少ないため、海外の方から何を考えているか分からないと言われるらしい。この点についても教えていただきたい。

→義務教育課長

・2020 年度から新しい学習指導要領というのが小学校で始まる。今回のものは、「主体的で、対話的で、深い学び」というのがメインになっており、日本人には、謙虚が美徳とされているけれども、外国の方というのはどんどん自分の意見を言ってくる。主体的で対話的というのは、そういった方に対して自分の考えを的確に表現できるコミュニケーション能力をもった子供達を育てるということ。まさにコミュニケーションを中心として、１つの答えだけではなく、色々な考え方ができる活動ということで、これからの学習は展開していくと思われる。

→三塚教育委員

・私たちの時代は、なかなか外国の方とのコミュニケーションは取れなかった。基本的に日本人は農耕民族だから、どうしても閉鎖的になってしまう。外国人は狩猟民族だから、割と開放的になっている。ただ、これから子供達の英語教育は小学校から全く変わりますから、子供達はコミュニケーション能力は身に付けられると僕自身は思っている。問題は大人である僕たちが意外とコミュニケーション能力がないじゃないかということ。逆に僕たちがしっかりこの歳になっても英語の勉強でもして、外国人とも話ができるようになる。親がそうなれば、子供はもう間違いなくこれからの学校教育の中で英語を学びますから、しっかりコミュニケーション能力は身につく。

→野田教育委員

・コミュニケーション能力というと、一概に僕らが相手のことを理解する能力と思っているが、相手も我々の言葉が分からないとなんとか理解しようとする。要はコミュニケーション能力というのは、お互いに理解しようとすること。コミュニケーションというのは言葉だけじゃない。ボディランゲージもそう。うちの母も耳がかなり悪くて、会話をするのにもう耳がほとんど聞こえないから、身振り手振りで「これおいしい」とか言って話をする。僕は手話はしないけれども、それでも十分耳が聞こえない母と会話はできる。要は伝えようとする、相手のことを理解する気持ち、というのがコミュニケーション能力というか、双方向の努力ということ。そこを、片方だけ伝える能力だって理解するところに、日本人のコミュニケーションがうまくいかない理由があるのではないかと思う。

→和田教育委員

・不登校の子供達は、まずあいさつがなかなかできない。不登校の子供達と関わっていくのに、まずあいさつをすることから始める。あいさつができるようになってくるとかなり自分のことを話すようになる。ただ、自分の考えをしっかり持てない子供達も多い。自信がなくて、それから自分で決めかねる。そこで二拓にして１つを選ばせるとか、どちらかを選んでもらうとか。小さい時から親が決めてしまっ

ていて、自分で選べなかったという子供達も多い。どうせ自分は駄目だからと自信のない子供達もいる。それで、子供達に接している時に、ちょっとでもがんばった時には褒めて、できるだけ自信を持たせるようにして、気持ちよく自分の言いたいことを伝えられるような環境を作っていくと、子供達も大変おしゃべりになってくる。それから、やはり親とうまくコミュニケーションがとれていないという家庭も多い。親御さんにも子供とできるだけ努めて話をしてもらったり、子供のいいところをできるだけ褒めてもらうと、ずいぶん自分の気持ちが話せるようになってきている子供達が多い。

→武者教育委員

・本来、成長の過程で、段階的にコミュニケーション能力を育むということができると本当は理想的。私が子供のころは年齢が様々な近所の子供達と集団で遊び、その場で遊びを考えるなんてことをやっていたけれど、そういった経験がやはり今の子供達というのは非常に少ないように思う。学校ではそろそろ運動会シーズンで、１年生から６年生までの縦割りのチームを作って、先輩が、１年生や２年生を指導しながら学ぶ機会を学校現場でも増やしていると思う。ただ、やはり、圧倒的にそのような経験が今の大人に比べると少ないので、そういう機会を少しでも増やしていかないといけない。

・中学生に講演などする機会があるが、やはりそこで、男女交際や人との関わり、人間関係の作り方ということも話さないといけないテーマになることがある。今の子供たちは、人との距離感が分からない。今の子供達はそういった通常の距離感、人との距離感が分からずにいることが多い。またコミュケーションのツールが、メールのような視覚的なものになってしまったりすると、思い込みですごく誤解をしてしまい、全くそういう気持ちはないのに誤解されて、仲が悪くなってしまい、それが悩みになってしまうなどというケースもよく見られる。できるだけ小学校とか中学校、学校現場での経験をとおして、友達同士、子供達で色々できる機会を、より多く作れるということが今は必要だと思っている。

テーマ３　児童生徒の体力向上について

１　人間力について

（質問・意見）

・体力向上の推進とはちょっと話が変わるかもしれないが、人間力を高めるということが一番大切ではないかと思っている。人間力を高めるにはどうしたら良いかと考えたとき、登山が良いと思う。登る時はすごく苦労するけれどそれを乗り越えて、最後に頂上に達することで、達成感を得ることができ、本当に人生そのものなのではないかと思う。家庭でも家族で登山をすることは、子供の人間力を高める上ですごく良いツールになるのではないかと思っている。

・それと、2020 年東京オリンピック・パラリンピックの開催にあたり、世界中からたくさんの人達が集まり、コミュニケーションを取るには最大の機会。県ではオリンピック・パラリンピックに向けて、例えばどのようなことを考えているのかお聞きしたい。

→守屋教育長

・子供達の体力を高めていこうということで、「健康・体力つくり一校一実践運動」、各学校で特色ある取り組みをやってくださいとお願いしている。登山も各学校色々創意工夫しながらやっていただけるかなと思っている。

・オリンピック関連では、高校生は、少なくともおもてなしをしていただく対象になる。例えば郡内、富士北麓の方にもものすごく大勢の海外の方々が来る。そういう方々のおもてなしをする機会を増やそうという取り組みをやっていて、大学の学生さんや地域の方々と一緒に郷土芸能や郷土食をふるまったり、案内をしたり、そういうことが可能になるようなイベントができないかと今一生懸命検討をしている。

→飯室教育委員

・体験というのが大事だと思う。勉学だけでなくて、体を動かすということが非常に大事ではないかと思う。オリンピックも練習会場などで、山梨県にかなり多くの海外の選手が来ていただける。そういうメニューをしっかり県民に披露して、子供達も一流の選手の競技を見れば、興味が深まるもの。その中から実際に何か始めることで、体力向上にも繋がると思っている。例えば秋には、今度社会人のラグビーもあり、もちろんヴァンフォーレのサッカーがあり、一流のスポーツを家族全員で見に行っていただければ、子供達はやりたいなということがあると思う。今、高校野球も県大会、秋の大会が始まっているので少しずつそのような取り組みを進めれば、体力向上も一歩前進しますので、ぜひどうぞよろしくお願いしたい。